

岩波
講座
日本文学史 第十四卷 近代

大衆文学史

荒 正 人

岩 波 書 店

大衆文学史

荒

正

人

大衆文学という呼び名は、通俗小説と混同しやすい。大衆文学もまた、一種の通俗小説と見ることができからである。だが、今日普通に行われている分類では、大衆文学は、時代物と現代物に分け、後者を指して通俗小説という場合が多い。前者を通俗小説と呼ぶ場合はない。初めは、大衆文学というと、前者だけを指していた。だが、しだいに、大衆文学は、現代物も含むようになった。なお、時代物というのは、明治以前の封建社会を舞台にした通俗小説である。一種の歴史文学でもある。だが、歴史文学というと、純文学系統のものを指すことが多い。大衆文学の前に、大衆文芸という呼び名が行われた時期もある。『中央公論』大正十五年（一九二六）七月号は、「大衆文芸研究」「大衆文芸論」という特集を掲げている。また、この年の一月、『大衆文芸』という雑誌も創刊された。だが、大衆文芸という言葉と並んで、大衆文学という言葉い方も少しずつ行われ、昭和初年にはついに、この言葉が定着した。昭和二年（一九二七）、平凡社から刊行された全六十巻の大衆文学の全集は、「現代大衆文学全集」と名づけられた。大衆文芸よりも、大衆文学というほうが、清新な感じがしたものらしい。大井広介は、近著「ちゃんばら芸術史」で、大衆文芸と大衆文学の違いを、質の違いと考え、前者は、通俗的な大衆文学だと述べている。大衆文学もむろん、通俗小説である。だが、当時、大衆文学を志した人たちは、大衆文芸とは違う新しい文学を創ろうと、意気込んでいた。それだけの作品も生れた。大衆文学の出現で、大衆文芸は一段地位が下った。大衆文学、大衆文芸の系列を辿ると、民衆文学につきあたる。民衆文学は、大正時代中期に栄えたもので、プロレタリア文学出現以前の、民衆の漠然とした希望に表現を与えたものである。プロレタリア文学の時代になっても、この希望のすべてが満たされたわけではない。プロレタリア文学では、大衆化が繰返し求められたが、実際には、知識人相手の文学に留まっていた。大衆文学は、本来なら、プロレタリア文学が果す役割を、別の形で肩代りしたともいえる。民衆文学が、一方ではプロレタリア文学、他方では大衆文学に分化したと見ることもできよう。

大衆文学をせまく解釈すれば、民衆文学以後に限らなければならぬ。第一次世界戦争の後、民主主義への要求が高まり、ジャーナリズムが発達した結果として、大衆文学が生れたことになる。だが、大衆文学の前にも、大衆文学の系列は存在した。ただ、大衆文学とは呼ばれなかった。たとえば、明治時代の政治小説、歴史小説、家庭小説、冒険小説、探偵小説などは、明らかに、広い意味の大衆文学である。この種の小説は、小説というより、むしろ読物にちかい。だが、広い意味での大衆文学の歴史では見逃すことはできない。

政治小説は、明治十年代の自由民権運動と結びついて発達した。板垣退助は、明治十六年、ヴィクトル・ユーゴーに会って、国民の政治教育をするためには、政治小説を読ませるがよいと言われ、原書を沢山買って帰り、その翻訳を勧めた。政治小説といっても、小説を手段として、民主主義の政治思想を説いたものである。オーウェルやケストラーの政治小説とは趣きを異にする。政治小説は、初め、翻訳物が多かった。後には、創作も行われるようになった。矢野竜溪(嘉永三年—昭和六年—一八五〇—一九三二)の「経国美談」(明治十六年)は、歴史物語の体裁をとった政治小説で、紀元前四世紀のギリシヤを舞台に、スパルタの王政から解放されるために働く独立運動家を語っている。東海散士(嘉永五年—大正二年—一八五三—一九二二)の「佳人之奇遇」(明治十八年—三十年)も、外国を舞台にしているが、主人公は、会津藩の士族で、時代は現代である。登場人物の思想は、格別高いものではない。一種の感傷主義が、時代の雰囲気になったものらしい。末広鉄腸(嘉永四年—一八九六)の「雪中梅」(明治十九年)「花間鶯」(明治二十年)は、舞台が日本になり、自由民権運動が主題になっている。政治小説は初め、翻訳物の影響もあり、外国を舞台にしていたが、やがて日本の現実を扱うようになった。また、政治小説が発展し、社会小説になった場合もある。いずれも啓蒙性が強い。大衆を啓蒙するために、小説を手段に使ったのだ。大正時代になって、社会主義者が、「社会講談」という講談を唱え、社会主義の思想を宣伝しようとしたことがあった。これは、明治初年の政治小説の伝統を受けついだものと見られよう。明治三十年代には、木下尚江(明治二年—一八九九)

「昭和二年」の「火の柱」（明治三十七年）「良人の自白」（明治三十七年）その他の社会小説が行われた。これは、大衆文学に近かった。プロレタリア文学は、一種の政治小説ではあるが、明治初年の政治小説とは全く関係がない。

政治小説について、歴史小説が登場した。村上浪六（（一八六五年—昭和一九四年））は、撥鬢小説を書いて人気を博した。町奴が巷に仁俠を競うという主題を創り出した。「三日月」（明治二十四年）で広く認められた。——三日月は或る時、飛鳥山の花見に旗本と争い、十七人を斬った。奉行の白須甲斐は情をかけ、五年の所払いですませた。三日月は、佐倉の城下に脱れる。一方、殺された旗本の家族は、佐倉の家老田原大角に頼み、奸計で三日月を討とうとした。それがうまくいかぬと、藩の力を借り、召捕ろうとした。三日月は、召捕りの武士を斬り、江戸に帰った。自分の町奴、町火消たちは、佐倉侯の屋敷に火をかける。大老酒井若狭守は、田原大角に切腹を命じ、また、三日月にも腹を切らせる。三日月は、俠勇に富んだ武士崩れである。封建社会の矛盾に抵抗するが、最後には屈服してしまう。安っぽいヒロイズムの肯定が、当時の人気を博したものであろう。だが、他の文学者からは輕蔑され、相手にされなかった。撥鬢小説というのも、自ら称したのではなく、他から名づけられたのである。

歴史小説の作家としては、福地桜痴（（天保二年—明治三十九年））、塚原波柿園（（嘉永元年—大正六年））、饗庭篁村（（安政二年—大正二年））、宮崎三昧（（安政六年—大正八年））、渡辺霞亭（（元治元年—大正五年））、その他がいた。歴史小説は、明治二十年代から三十年代にかけて盛んであった。講談の影響を受けたものが多く、内容は低かった。渡辺霞亭は、新聞小説をおもに書いた。大石内蔵助、荒木又右衛門、銭屋五兵衛、高山彦九郎、吉田松陰、二宮尊徳、豊臣秀吉、楠正成、高野長英、乃木大将など、歴史上の英雄、偉人を主題にした読物ふうの作品を盛んに書き、その数は千余篇におよんだ。一時に十種類も連載したことがある。今日の流行作家の先駆者ということができよう。

明治三十年代には、家庭小説が栄えた。徳富蘆花（（明治元年—昭和二年））の「不如帰」（明治三十一年）と、菊池幽芳（（明治三年—昭和三年））の「己が罪」（明治三十二年）が、この種の小説の型をきめた。「不如帰」の浪子は、武男と結婚し、楽しい生

活を送っているが、姑の川島未亡人が気難しくて苦しむ。やがて、浪子は肺結核になる。武男は浪子を励まし、病気は少しよくなってきた。ところが、川島未亡人は、肺結核を怖れ、一家の断絶を憂えて、浪子を離婚する。日清戦争の開戦間際だったので、武男は出征しなければならず、母と争うひまがなかった。やがて、戦争から帰った武男は浪子の死を知り、悲しむ。――嫁と姑の関係から生れる家庭悲劇を主題にしたもので、浪子が結核にかかったことも、この悲劇を一層色濃くした。武男の態度は大変生ぬるいものだが、当時にあつては、浪子との夫婦愛を貫いたものとして賞讃された。この愛情の土台には、消極的ながら、キリスト教にもとづく一夫一婦の思想がある。

「己が罪」は、「不如婦」について広く読まれた。――大阪天下茶屋の豪商箕輪伝蔵の一人娘環は、母を失った後、父の手一つで育てられ、十四歳の時上京し、女学校にはいり、四年生になる。彼女の美貌は評判になり、医学生塚口虔三という恋人ができた。かれは、福島素封家に生れ、頭もよかったが、平気で女を玩んだ。塚口は、同郷の大木小枝子が、学校の教師で、環の世話をしているのに目をつける。或る朝、環は小枝子と箱根の温泉に出かけた。その時、塚口に欺かれ、環は身を許してしまう。塚口と環は、教会で結婚式をあげた。だが、それは偽りであった。塚口には他に許婚者がいた。環は悲観し、身を投げようとしたが、助けられ、やがて男の子を生んだ。その子を里子にし、父の許で静養していた。そして、桜戸子爵と結婚することになった。正弘という子供が生れた。その子供が七つの時、房州海岸に遊んだ。その時正弘は、漁夫の子と一緒に波に吞まれて死んだ。漁夫の子というのは、塚口との間にできて、里子に出した子供だったのだ。環は悲しみのあまり、過去の秘密を夫に打明け、懺悔した。夫は環をうとましく思った。環の父は、娘可愛さのあまり自殺して詫びた。その結果、環と夫は再び平和な家庭を営むことになった。

「己が罪」は、最後が幸福な結末である。「不如婦」とは異なる。だが、「不如婦」も「己が罪」も、その結末が一種の道徳的解決という点では似ている。「不如婦」の浪子は死んだが、川島未亡人は、作者によって裁かれている。なお、

家庭小説の主人公が、可憐な女性、美貌の女性であり、読者の同情を得る女であることも特色である。家庭小説の読者は女性であった。文学的教養はないが、生活の実感を通じて、家庭の矛盾をよく知っていた。家庭小説は、そういう女性たちを慰めるものであった。

中村春雨（明治一〇年—昭和一六年）の「無花果」（明治三十四年）も家庭小説の代表作であった。牧師を主人公にし、その悩みと罪を主題にしたもので、「不如帰」よりも一層、キリスト教思想との交渉がふかい。家庭小説の「家庭」は、キリスト教諸国の「ホーム」を意味する。明治になって、これまでの「家」がしだいに、「家庭」になっていく道筋に生れたものである。「不如帰」の川島未亡人も、「家」の時代ならば、むしろ、賢夫人として称えられたであろう。なお、徳富蘆花の「思出の記」（明治三十三年—三十四年）を家庭小説の傑作と評する人もいる。一種の立身出世小説だが、雰囲気は明るく、清潔である。明治の上昇期の健康な精神を表現したものである。「思出の記」は、たんなる家庭小説でも、大衆文学でもない。だが、今日の純文学でもない。純文学と大衆文学の要素が、巧みに調和を保っている。一種の国民文学である。

家庭小説の作家には、以上のほかに、柳川春葉（明治一〇年—大正七年）をあげなければならぬ。「生さぬ仲」（明治四十五年—大正二年）が有名である。一人の子供をめぐり、生みの母と継母との愛の葛藤を描いたもので、勧善懲悪の態度で貫かれている。二人の母親に挟まれて苦しむ少年の姿は、生きいきと描かれている。だが、勧善懲悪であり、それに幸福な結末なので、鑑賞力の高くなった読者からは、しだいに見棄てられてしまった。なお、「伯爵夫人」（明治三十八年）を書いた田口掬汀（明治八年—昭和一八年）などの場合にも、同じことがいえる。

「不如帰」は、今日では、大衆文学としてしか取扱われない。当時は、或る程度高い読者にも読まれた。この系統のものには、尾崎紅葉（慶応三年—明治三六年）の「金色夜叉」（明治三十年—三十六年）、小杉天外（慶応元年—昭和二年）の「魔風恋風」（明治三十六年）、小栗風葉（明治八年—大正五年）の「青春」（明治三十八年—三十九年）などがある。「金色夜叉」は、金銭

と恋愛、「魔風恋風」と「青春」は、当時の新しい風俗であった女学生の恋愛などを扱っている。「金色夜叉」には、当時の既成道徳への批判も幾らかこめられていた。今日から見れば美文で綴られた通俗小説にすぎない。だが、この作品も、「不如帰」と同じような読まれ方をしたのである。——明治二十年代から三十年代の初めにかけて、二葉亭四迷、森鷗外、北村透谷、樋口一葉、島崎藤村などが、ヨーロッパ文学の影響を受けて、新しい文学を創りはじめていた。だが、その読者層はきわめて狭かった。また、作家の側でも、純文学の文壇を形成するにいたらなかった。純文学系統の作者が文壇を持ったのは、明治四十年代、自然主義の文学運動が根を張ってからである。それまでは、一般の読者には、純文学と通俗文学という厳しい区別は余りなかったらしい。純文学の自覚を強く抱いたのは、自然主義文学者である。かれらは、尾崎紅葉の硯友社の文学を、戯作文学として否定した。同時代の夏目漱石の文学を、通俗小説として軽蔑した。小杉天外や小栗風葉は、自らも通俗小説であることを認めて、仕事をしたのである。

つぎに、冒険小説を見てみよう。明治になってから、ヨーロッパの冒険小説の類が無数に翻訳された。創作では、矢野竜溪の「浮城物語」(明治二十三年)、翻訳では、森田思軒(万延元年—明治十九年
一八六〇—一八九六)の「十五少年」(明治二十九年)が有名である。——「浮城物語」は、南洋を舞台にして、二人の冒険家の活躍を語ったもので、当時の日本人の野心を掻きたてた。「十五少年」は、ジュール・ヴェルヌの「二十年間の休暇」の翻訳である。ニュージーランドの或る学校の少年が十五人、船に乗り、海に漂い、孤島に上陸し、ロビンソン・クルーソーの生活をする物語である。翻訳は流麗な意訳である。若松賤子(元治元年—明治二十九年
一八六四—一八九六)の「小公子」(明治二十三年—二十五年)とともに、明治初年のすぐれた翻訳文学である。「小公子」は、バーネットの「リトル・ロード・フォントルロイ」の翻訳である。これは、イギリスの家庭小説である。以上の二作品の影響を受けて、無数の冒険小説が生れた。ただ、余りすぐれたものはない。押川春浪(明治一〇年—大正三年
一八七〇—一九一四)の「海底軍艦」(明治三十二年)その他があるだけにすぎぬ。それも余りに荒唐無稽で、少年文学としても欠点が目立つ。

探偵小説も幾つか翻訳されたが、初めは余り反響を呼ばなかった。今日のような本格探偵小説ではなく、怪奇小説、犯罪小説の類が、漠然と探偵小説と呼ばれていた。低級なものが多く、まともに相手にされなかった。ただ、黒岩湛香（文久三年—大正九年）（一八六二—一九二〇）が、探偵小説や、その要素を持った作品をしきりに翻案した。登場人物の名前も、日本名にしたりして苦心した。「巖窟王」（明治三十四年—三十五年）は、アレクサンドル・デュマの「モンテ・クリスト伯」の翻案として有名である。だが、涙香も、本格物の探偵小説を書くにはいたらなかった。当時はまだ、探偵小説を生むだけの条件がなかったのである。

大正時代になると、まず、中里介山（明治一八年—昭和九年）（一八八五—一九四四）の「大菩薩峠」が登場する。この小説は、大正二年九月、『都新聞』連載が始まりで、昭和十六年に刊行された「椰子林の巻」が最終巻で、その後も書きつづける予定だったが、未完である。初めは、巻の名前がなかったが、後に、単行本として出版する時につけることになり、それからは、新聞発表の場合にも、何々の巻とつけた。全三十九巻である――。

「甲源一刀流の巻」「鈴鹿山の巻」「壬生と島原の巻」「三輪の神杉の巻」「竜神の巻」「間の山の巻」「東海道の巻」「市中騒動の巻」「駒井能登守の巻」「伯耆の安綱の巻」「如法暗夜の巻」「お銀様の巻」「慢心和尚の巻」「道庵と縮八の巻」「黒業白業の巻」「安房の国の巻」「小名路の巻」「禹門三級の巻」「無明の巻」「白骨の巻」「他生の巻」「流転の巻」「みちりやの巻」「めい、ろの巻」「鈴墓の巻」「Oceanの巻」「年魚市の巻」「畜生谷の巻」「勿来の巻」「弁信の巻」「不破の関の巻」「白雲の巻」「胆吹の巻」「新月の巻」「恐山の巻」「農奴の巻」「京の夢逢坂の夢の巻」「山科の巻」「椰子林の巻」

時代は、幕末。机竜之助は、武州御嶽山の奉納試合で、宇津木文之丞を斬殺す。文之丞の弟兵馬は、竜之助を仇と狙う。竜之助は、お浜と一緒に江戸に出て、三年ほど暮す。竜之助はお浜を殺し、新徴組に加わり、京都に向う。京

都から大和路にはいり、江戸に帰ろうとする途中、天誅組の武士とともに、十津川に立籠り、戦いに敗れ、火薬で盲目になり、伊勢に渡って眼の治療をする。その間、兵馬は竜之助を追う。竜之助は、三保の松原で兵馬に会うが、脱れて甲州に移る。舞台は江戸、京都、大和、紀伊、甲斐、信濃、飛騨その他にまたがる。登場人物も、以上のほか、お銀様、お雪、おわか、七兵衛、百蔵、弁信、道庵、米友、駒井能登守など、百人に近い。——「山科の巻」では、竜之助が京都にはいると同時に、お銀様も山科に移り、つづいて米友、弁信もやってきて、事件が新しく展開しようとする。つづいて、「椰子林の巻」では、駒井能登守の無名丸は、南洋を漂流し、椰子林の蔭に安住の地を求める。一方、山科は、妖気に包まれ、何事かが始まろうとし、明治維新が近づく。

「大菩薩峠」は、古今東西の文学に類のない大長篇である。普通の小説と違って、主人公はない。机竜之助は、主人公というより、主要な人物というべきである。また、全篇を通して上求菩提、下化衆生という仏教的世界観、人生観が貫く。人間のカルマを描こうとした。小説の構成の点でいえば、前半「弁信の巻」までは、普通の構成をとっているが、「不破の関の巻」以下は、作者の心境を直接語ろうとした点が目につく。「農奴の巻」のように、登場人物に托して、作者の心境の一端を述べた個所もある。ここでは、米友が土に生きる決心をしているが、作者の時代にたいする、作者の姿勢と受取ることでもできよう。——机竜之助は、この作者の創造した独自の人物である。「机竜之助の如きは勤皇家でもなし、佐幕党でもない、近藤土方のやうな壮快な意気組があつてもない」また、作者はつぎのように描写する。「助けらるべき人を見殺しにするそこに一種の痛快な感じを以て、竜之助は人を殺したあとで見する冷笑を浮べて寝ころんでゐるのです」つまり、机竜之助は、普通の人間的感情を棄てた人物として設定される。しかも、この男は、ひとたび剣を握れば、たちまち相手を倒してしまふ。盲目になつてからも、依然として強い。一種のスーパー・マンである。しかも、人間的感情や理想というものを全く持ち合せていない。徹底した虚無的性格である。この種の人物が、なぜ、小説の主人公として魅力を持つのか、一応は疑問に思われる。だが、理想をなまじっかふりか

ざす人物よりも、目的なしに人を殺し、時代の動きに超然としている強い人物のほうが、反って人間的ではあるまいか。人間の深層心理は、文明と無縁であり、原始の野蛮に通じる。この小説は、庶民の心理の底にひそむニヒリズムに訴える点が多い。庶民ばかりではない。知識人にも強く訴える。昭和初年、群司次郎正の「侍ニッポン」という小説が映画になり、その主題歌が大変流行した。――「昨日、勤王、明日は佐幕、／どうせおいらは裏切者よ。」これは、当時の左翼運動にたいする知識人の微妙な心理を反映している。知識人は、裏切者になることを怖れている。だが、机竜之助は、裏切者の次元を平然と踏みにじている。その強い性格は、知識人にとって、大きな魅力である。かれは、ただ強いだけの男ではない。その生活態度は、人生観と一体になっている。虚無主義を観念として受取るのではなく、生活を通して実践している。作者がどんな動機でこの人物を創造したのか。それはほぼ判る。だが、何を握り所にしたか、それは臆測の範囲を出ない。空想から生れてきた人物ではない。中里介山は、若い頃、キリスト教に近づいたり、また、社会主義を信奉したりした時期もある。そういう複雑な屈折を経て机竜之助にいたったか、その道筋はまだ明らかでない。堀田善衛は、机竜之助と対照的な人物として、駒井能登守を通じて、机竜之助の二人は、一人の人物の裏と表、陰と陽である、と面白い意見を出している。つまり、駒井能登守を通じて、机竜之助の秘密に達することができる、と示唆している。駒井能登守は進歩主義者で、西洋式造船研究所を営んだりしている。民主主義を信じている。だが、日本の実情を無視し、観念的である。これは、中里介山の若い頃と多少関係がある。社会主義思想に熱中したのは、数え年十八から十九までの頃である。その後、貧しい子供たちを教えたり、トルストイ主義や仏教にも心を惹かれた。その間の事情がもう少し判れば、駒井能登守と机竜之助の関係も、多少解けよう。

「大菩薩峠」が、他に類のない作品であるのと同じく、中里介山もまた、独自の生活態度を守っていた。戦争中、文学報国会ができ、他の文学者が争って入会した時にも、自分は文士ではないからと言って拒絶した。また、「大菩薩峠」を大衆小説といわれるのを嫌い、自らは大衆小説と呼んでいた。仏教の精神にもとづいた小説という意味であつ

た。なお、机竜之助は、大衆文学に大きな影響を与えた。林不忘の「丹下左膳」、土師清二の「砂絵呪縛」、群司次郎正の「侍ニッポン」などから、最近では、柴田錬三郎の「眠狂四郎無頼控」にいたるまで、机竜之助の影響の下に生れた人物を主人公にしている。大衆文学の主人公として、他に類のなかった虚無的性格を登場させた点で、中里介山の功績は大変大きい。

「大菩薩峠」は、大正時代に流行した宗教文学と照らし合わせて見ることもできよう。倉田百三の「出家とその弟子」、賀川豊彦の「死線を越えて」、江原小弥太の「新約」、石丸梧平の「人間親鸞」、大泉黒石の「老子」、吉田絃二郎の「ダビデと子たち」などが一時人気を得た。いずれも、大正十二年の関東震災以前の作品である。宗教文学は、民衆文学とともに、プロレタリア文学の登場とともに急に姿を消した。宗教という糖衣に、ヒューマニズムないしは社会主義を包んだものであった。「大菩薩峠」は形の上でこそ宗教文学だが、内容の点では、他に類のない異端の文学である。だからこそプロレタリア文学を越えて生き残ったのである。

「大菩薩峠」は、大衆文学の流れのなかで、特別の存在である。一般に、狭い意味の大衆文学が成立したのは、第一次世界戦争が終ってから、大正の末期にかけてである。戦後、民衆の知的水準も向上し、一方、出版資本も大きくなり、文学の通俗化で、多数の読者をつかもうとした。大正七年、久米正雄は、『時事新報』に「螢草」を発表し、純文学から通俗小説に転じた。その動機として、新聞小説のほうが原稿料が多いからだと言っている。純文学は、余技にすぎぬとも語った。大正九年には、菊池寛が、『東京日日』『大阪毎日』に、「真珠夫人」を書き、やはり、通俗小説に転じた。

時代物では、白井喬二（明治三十九年—一九一九年）の「富士に立つ影」が、「大菩薩峠」と並んで注目を浴びた。この長篇は、大正十三年七月から昭和二年七月まで、『報知新聞』に連載された。「裾野篇」「江戸篇」「主人公篇」「新聞篇」「神曲篇」「帰来篇」「運命篇」「孫代篇」「幕末篇」「明治篇」の十篇から成る。時代は、文化・文政の頃から明治初年にまでお

よぶ。赤針流熊木家と賛四流佐藤家の三代にわたる物語である。初めに、富士の裾野で、熊木伯典と佐藤菊太郎が、築城のことで争い、伯典が勝つ。つぎに、熊木公太郎と佐藤兵之助が、日光の築城で争い、こんどは兵之助が勝つ。だが、いずれの場合も城は完成しない。伯典は、悪人として設定され、また、その子の公太郎は、天真爛漫な自然児であり、魅力に富んだ善人である。伯典は、相当な悪人だが、他の作品に例を求めることができぬというわけでもない。だが、公太郎は、作者独自の創作である。他に類のない独自の性格である。公太郎は、この作品のなかほどから出てくるが、作者のいう通り主人公である。机竜之助も特異な人物だが、公太郎はさらに特異である。肯定的性格をこれほど生きいき写した作者の手腕を、高く買いたい。また、佐藤菊太郎と息子の兵之助の対照も興味をそそられる。菊太郎は真面目な学者だが、兵之助は、時に権謀術数を玩ぶことも辞さない。――作者は、人物の対照に力を注いだ。三代も続く事件を扱った大長篇を、退屈せずに最後まで読みとおせるのは、互いに異なった人物が登場し、闘争を演じるからである。伯典の息子に公太郎が生れたのは不思議な気もするが、対照の妙を創り出すための工夫であらうか。作者は、人間の運命を、親、子、孫と伝えられてゆく不思議な力だと考えているらしい。これも一つの特色である。人間を、因果関係の網目のなかにとらえようとする。「大菩薩峠」の書出しも見事だが、それは、事件の発端の舞台を提供したにすぎぬ。「富士に立つ影」の書出しは、発端の舞台であると同時に、全篇の象徴になっている。

甲板の上には、伯典の孫熊木城太郎が、いつまでも立ち尽くして離れ行く日本の陸（き）をジッと眺めてゐた。
「父が生きてゐる？ ハテナ、変なことを云ふ人だ」
などと思ひながら。

富士山の頂上（いただき）が雲の間にウッスラと浮んでゐた。

これは、この長篇の最後で、伯典の孫熊木城太郎が、佐藤城太郎と和解し、アメリカに赴く時の情景である。「裾野篇」に描かれている富士は、愛鷹山から下の裾野だが、ここでは、富士は、頂を見せている。この長篇は、富士の裾

野に始まり、その頂を望むまでの物語だといえなくもない。なお、伯典と菊太郎に始まる確執の原因が、築城法という技術であったことも面白い。この種の学問、技術が、大衆小説の大切な要素になる例ははなはだ少い。そういう新しい領域を拓いたのも作者の功績である。「大菩薩峠」は、後半が前半とうまくつながらぬ欠点を持つが、「富士に立つ影」では、全体の構成にあくまで注意が払われている。小説らしい小説に仕上げている。ただし、孫の代になると、繰返しが多く、また、人物も小さくなり、蛇足に近い感じもする。最後に、この小説の長所をもう一つあげれば、挿話に苦心が払われていることである。たとえば、公太郎が知合いになった猿飼いの少年の話など、それだけで独立した中篇になる。この種の挿話はほかにも多い。挿話がモザイクふうになぎつめられている。だが、そのモザイクからは、はっきりした主題が読みとれる。要するに、「富士に立つ影」は、「大菩薩峠」と全く別の行き方で成功した大衆文学である。

吉川英治（明治三五年—一九二二年）と大仏次郎（明治三〇年—一九二七年）も、大正時代の終りから、大衆文学を書きはじめている。

吉川英治は、大正十二年、『毎夕新聞』に「親鸞記」を発表した。当時、この新聞に勤めていたのであった。大正十四年に、『キング』に「剣難女難」を発表して、名声を博した。美男の剣士をめぐって、美女、毒婦、その他いろんな男女が登場する。人物は典型的だが、筋は複雑でサスペンスに富んでいた。続いて大正十五年、『大阪毎日』に「鳴門秘帖」を発表し、大衆文学の第一人者として迎えられた。

竹内式部の尊王討幕のはかりごとの敗れた宝暦の変の直後。阿波二十五万石蜂須賀重喜は、青年公卿などとともに討幕の機会を狙っている。その秘密を探るために阿波に乗込んだ甲賀世阿弥は、捕えられ、剣山の獄に捕えられた。一人娘の千絵は泣きくらしていたが、十年たっても父親が帰ってこないのので、甲賀家は断絶しなければならぬ。乳母の兄唐草銀五郎は、供の太一を連れ、世阿弥の安否を探ろうと出かける。だが、旅費と千絵からの手紙を拘られてしまう。拘ったのは、お綱という妖婦である。お綱は、その手紙を目明しの万吉に渡す。万吉は、太一を追って、それ

を戻そうとする。太一はやがて、主人の銀五郎に再会する。その時の話を阿波侍に聞かれ、殺されかけた時、助けてくれた男がある。千絵の恋人で、行方知れずの法月弦之丞であった。弦之丞の一行は、剣山をめざす。剣山では、死期の近いのを知った甲賀世阿弥が、血で遺言を書きつけていた。なお、蜂須賀方では、甲賀世阿弥を殺すために武士を向けていた。一行との間に死闘がくりひろげられる。世阿弥は殺されたが、死ぬ前に、お綱と親子の名乗りをあげた。一行は、十重二十重の罅みを逃れ、鳴門を越えた。世阿弥の心血を注いだ遺書も持帰った。弦之丞は、幕府のためには大きな手柄を立てたが、突然世阿弥の秘帖を二つに割き、一つを、剣山で助けてくれた人に届けた。そのため、蜂須賀家は取りつぶしをまぬがれた。弦之丞は、意外な告白をする。自分は、幕府方の味方ではなく、皇室の衰微を嘆いている、と。弦之丞は、千絵とともに人知れぬ場所に脱れ、一生を送る。

「鳴門秘帖」は、当時、読者から異常な歓迎を受けた。小林多喜二は、「不在地主」の前がきに、「鳴門秘帖」を読むような気持で読んでほしい、と書きそえた。だが、今日から見れば、余りに荒唐無稽である。伝奇物語としても、多くの無理が目立つ。人物は、類型的というよりも、終始一貫していない。法月弦之丞も、筋を運ぶための操人形にすぎぬ。この作品は、「富士に立つ影」などにくらべても著しく劣る。だが、これまで小説など読まなかった低い読者層を大幅に開拓した功績は認めなければならぬ。

吉川英治にくらべて、大仏次郎は、或る程度高い読者層を相手にした。初め、博文館の『ポケット』に「鞍馬天狗」を書いていたが、大正十五年、『大阪朝日』に「照る日くもる日」を発表し、その実力を広く認められた。——劍客として名高い旗本加納八郎は、幕府の要人の懐刀だったが、幕府を守るために秘密結社をつくる。一刀流の岩村兎道が加わる。鬼道の娘お妙は、父の高弟細木年尾と愛しあう。だが、年尾の父新之丞は、倒幕運動の首領である。新之丞は、山窩の仲間を装い、山賊になって軍用金を集めている。ところが、山窩の白峰お銀は、新之丞の息子の年尾に心を寄せている。やがて、新之丞は幕府に捕えられようとして自殺する。なお、年尾は、新之丞の子供でなく、捨子を

拾ったものと判明する。つぎに、易者の白雲堂が登場する。白雲堂と年尾は手を組んで、加納八郎の秘密結社とたたかう。結末は明治維新となり、加納一派は滅び、代って、白雲堂と年尾が勝利を占める。なお、年尾は、加納の子供であった。この小説の新しい点は、加納八郎と、細木年尾、白雲堂が、それぞれ新旧の時代を代表する人物であり、個性を持っている点である。「鳴門秘帖」などには見られぬ批評精神も、適度にはたらいっている。こういう点で、知識人の読者にも受けたものと思われる。

大正時代の大衆小説の作家には、「敵討日月双紙」の三上於菟吉（明治二十四年—昭和九年）、「太閤記」の矢田挿雲（明治五年—明治三十八年）、「修羅八荒」の行友李風（明治三〇年—昭和八年）、「落花の舞」「燃ゆる渦巻」の前田曙山（明治四年—昭和六年）などがある。ただし、吉川英治、大仏次郎などのように個性の強い作風は示さなかった。

前述のように、久米正雄は大正七年に「螢草」を書き、菊池寛は大正九年に「真珠夫人」を発表した。純文学の側から通俗小説に移った作家として、注目を浴びた。久米正雄、菊池寛の小説は、家庭小説の系統に近いが、近代小説を経てきたので、主題、人物、筋の進め方などにも、新鮮な感じが伴ない、その点でも人氣を博した——「真珠夫人」は、つぎのようである。

主人公の瑠璃子は、真珠のように美しい令嬢で、父は男爵である。杉野という恋人がいた。彼女は、船成金の莊田に計られて、その妻になった。妻にはなったが、夫に身を許さなかった。そして、先妻の残した白痴の息子に、自分の夫を殺させてしまった。やがて瑠璃子は、社交界の女王になり、青年たちの心をもてあそぶ。その一人、青木淳は、失恋して、悲しみの余り死んだ。その弟、稔は、瑠璃子の義理の娘美奈子の恋人であった。かれは、瑠璃子が美奈子に冷淡なのを憎み、殺してしまう。死にゆく瑠璃子の肌には、最初の恋人杉野の写真が秘められていた。不幸な結婚のために、心ならずも妖婦になった瑠璃子も、内心では最初の恋を守っていたのである。

「真珠夫人」の舞台は、ブルジョアの家庭である。家庭小説が、貴族の家庭を舞台にしたのと似ている。貴族もブ